美術講座
ストーブを囲んで

臼井吉見の『安曇野』を語る

平沢重人（臼井吉見文学館長、当財団理事）
太田　寛（安曇野市長、当財団理事）

令和五年十一月二十五日（土）於：グズベリーハウス

平沢　皆さん、どうもこんばんは。私の方で前座を務めさせていただいて、本論は私の右に座っておられる方にお任せしようと思います。私は喋るとボロが出て来てしまいますし、私とは違い、『安曇野』が愛読書という安曇野市長の太田さんのような方と一緒にこんな場所にいることは不本意でございますので。

今日は昼間、臼井吉見文学館友の会で第一回のシンポジウムを開かせていただきました。「Z世代と語る令和の愛国心」というタイトルで。ちょっと過激なテーマで、開かせていただいたんですけれど。その会が終わった後に、お名前は存じ上げている方もいるかもしれませんけど、松本にお住まいの西村忠彦先生、もう九十三、四歳になられる方が来られて、西村先生ご自身はご退職された後、平和の活動であるとか、地元の生涯学習的なものであるとか、そういうものを熱心になされて、今の松本の文化行政とかの基礎を、ずっとこう応援してこられた、そういう方なんです。その方が「安曇野で、市民活動としてこういうような取り組みをするというのは、本当に安曇野というのは素晴らしい」と誉めてくださいました。そんな西村先生から声をかけてもらえて、評価してもらえて、自分としてはよかったなと。でもただやって、それでなんだっていうことなので、続けていくことで、それが血となり、肉となり、そういうことをやっていかなくてはならないなと思っています。

そこで今日こういう時間を頂いて、自分も教員を六十までやっていたので、横沢正彦先生、お生まれは、というかお住まいは池田だったんです。安曇野市教育会の前身は南安曇教育会なんですけれども、安曇野の教育について本当に熱心に取り組まれた横沢先生の話をしようかなと思っています。既に平成二十八年の『碌山美術館報』の第三十六号を見ると、ここに私の前に館長をやられた内川美徳さん、明科の方です。この内川さんと、今日もお見えですけど、伊藤正住さん。私は伊藤さんをおいて文学館友の会の研修活動はないと思っています。その正住さんと、故人となられてしまった五十嵐久雄さんが臼井吉見によせてお話をされています。平成三十年には武井さんが「荻原碌山研究委員会委員長横沢正彦を語る」ということをすでにやっていて、もう語られちゃっているんですね。やると決めて、どうしようかなという気持ちでいたんですけど、私は文書館にも勤めているので、文書館には一次資料っていうのもあるんで、それが強みなので、それを少し今日は皆さんにご紹介をしながら、横沢正彦先生や臼井吉見と横沢先生との御関係について少しお話しさせていただきたいというふうに思っています。

資料の方をお配りさせてもらったのでちょっとそれを見ていただきたいと思うんですけれども。横沢正彦先生は『安曇野』に実際登場するんですね、幅谷館長の方からこの会の講師紹介のごあいさつのところで『安曇野』には二〇〇〇人を超す人物が出てくるって、すごい数ですってお話しされていましたが、横沢正彦先生が最初に登場するのは、第五部の頁でいくと三二八頁ですね。そこにどうやって登場するかっていうと、安曇教育会、これはちょっと臼井のフィクションで、そう書いていますが、当時は南安曇教育会だったので、その辺がまあ臼井がこれは小

説ですって、言うところですね。そこには「安曇教育会ではかねて碌山について調査研究中だったが石井笹村の指導で精細な伝記をつくる議論が進められていた。それを一巻にまとめるにあたってぜひとも黒光の一文が欲しかった。委員長の横沢校長から連絡があって」。と、このようにここに横沢正彦先生が実名で登場するんですね（図1）。それで、配布資料の右側に臼井吉見の生原稿を載せておきました（図2）。臼井吉見文学館は開館が平成の三年なんですけれども、その時にご長男の臼井高瀬さんからこの生原稿をご寄贈いただいているんですね。当時は堀金村だったんですけれども。それが文書館ができたので、文書館で、冷暖房付きの、温湿度管理のきっちりとできるところで、『安曇野』の生原稿と『獅子座』の生原稿すべてを収蔵しているんですが、その『安曇野』の生原稿のなかで、この第五部の登場するところを一生懸命探しました。そうすると出てきたんですね。これは臼井の直筆であります。これは初稿のものなんですよね。第一行目の真ん中へんからになっているんですね、「研究中であったが、笹村の指導で」云々と。当然活字にするにあたって何回か校正入ってくると思うんですよね。ですがこれを見るとですね、句読点一つも狂いがないですね、臼井の明晰さというかね、すごいですね、ほんとに一発で製本できてしまう。生原稿と実際活字になったものを比べてみるとそういうことを感じましたので紹介しました。文書館の宣伝をするとこういう生原稿が全部ありますので、研究のために使いたいと言えば原本を提供したいと思います。ちょっと見てみたいなという方はもう全部デジタル化してあります。見てもらうと活字になった部分と生原稿の部分と、どういうところが違ってくるのかなっていうのを比べてみると、ちょっと面白いと思います。名前とか登場人物の名前とかだいぶ変わってきています。

それでは少しペースを上げて、太田市長に早くわたすために私は早く終わらなければなりませんので。昭和二十八年南安曇教育会で立ち上げた荻原碌山研究委員会のことについては、先ほども話した平成三十年の館報で武井さんが記されているので、みなさん確認していただければい

安曇教育会では、かねて碌山について調査研究中だったが、石井、笹村の指導で精細な伝記をつくる計画が進められていた。それを一巻にまとめるに当って、ぜひとも黒光の一文がほしかった。
委員長の横沢校長から連絡があって、碌山についての回想を求められたとき、良は愛蔵にさき立たれた傷手から立ちあがれないで臥床中であった。気に入りの八重桜の咲くころまでには回復できるものと見当をつけて、躰の調子のよいときに連絡するという条件つきで、申入れを承諾したのであった。
一八ヒオイデマツとの電報を受取った三郷中学校長の横沢が、東京の石井、笹村と連絡、上京して

図1

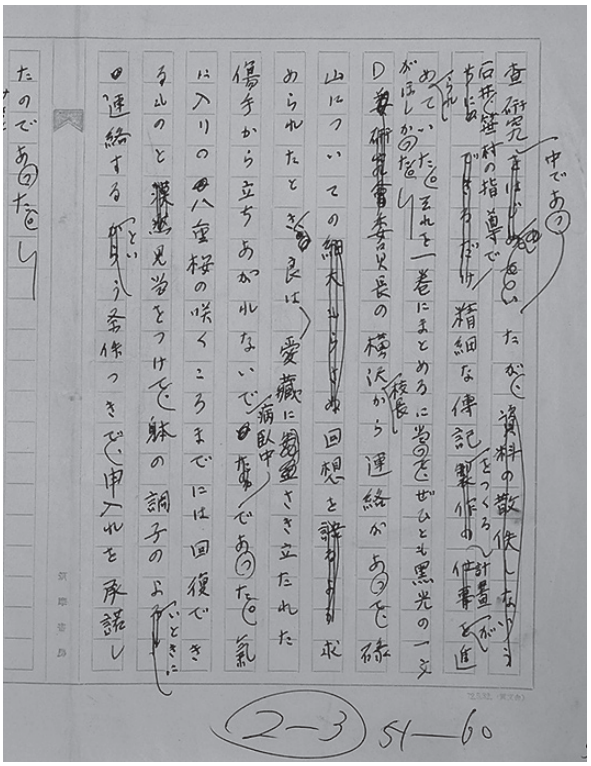

図2

いですけれども。横沢正彦さんは梓川中の校長だったんですね。梓川は松本にいってしまいましたけれども。この委員会っていうのは二年後に碌山作品保存会っていうのに変わっているんです。

三十三年に碌山美術館が立ち上げられるわけなので、碌山作品の保存ということで建物をどうするかとか、荻原家との交渉っていうか相談とか、そういうことに梓川中におられた横沢委員長がやってこられたということになるんです。横沢先生は二十八年に、あの研究委員会を立ち上げるんですけれども、委員長になるんです。けれども、この前年は瑞穂中学校というところの校長をやっているんですね。現在の三郷中学校ですけれども、三郷中っていうのは昭和三十年に小倉と明盛と温とが合併をして三郷村ができるので、正式にそこで三郷中学校になるんです。その前、わずかの間なんですけれども今の三郷中学校のところに学校を新しく作ったんですね。それを瑞穂中学校というふうに言っています。横沢先生は三郷中学校の校舎の設計もされているんですね。なので設計をして完成して、さあ瑞穂中学校頑張ろうっていうふうに思ったら梓川中に異動になってしまった。碌山館建設においても、横沢正彦はとてもご尽力されたんですけれども、三郷中学校の建設についても当時の神谷村長さんかな、神谷村長さんにもう絶大な信頼を受けていて、学校の設計を全部、校長お前任せるって言って、それで議会を通した。それだけのあの眼力のある力量のある横沢先生だから、瑞穂中学校も堂々と発足したし、その後の碌山館もできたかなあっていうことを思っています。

そこで横沢先生ですけれども、レジュメの二頁のところにちょっといくつか載させてもらいます。これから話をするのはこの横沢先生と臼井吉見との関係です。横沢先生と臼井との関係はどうだったのかということに次はなるんですけれども。昭和十三年度に穂高小学校の学事報告というのがあります。これは文書館のもので自由に見られます。そこを見ると昭和十四年三月三十一日付の、昭和十三年度末の人事異動で転出の名簿の中の右から三番目に「横澤正彦氏」って書いてありますね（図3）。「女子師範附属小学校」と。なので横沢先生は穂高小学校から松本の女子師範附属小の方に、この昭和十四年度に異動しているんですね。臼井吉見が伊那中を出てこの女子師範で松本の附属に入るのは、昭和十六年だと思うんですよね。なのでまあ横沢先生の方が先にこの附属に入り、その後臼井が異動してくるっていうことでいいかなと。伊藤さん、それでいいですよね。私も細かい資料を持ってこなかったんで、確かそうかなって思うんですけど。なので臼井は女子師範附属の校長で赴任してってことがここに出てきますね。さっき西村忠彦先生の話をしたんですけれども。西村先生は、臼井吉見と俺はね、深い関わりがあるんだって話をしてくださった。何かというと臼井吉見校長が壇上に登って、まあ軍事服を着て、私たちに訓示を話してくれたって。昭和十六年っていうふうに覚えてるという話ですが、

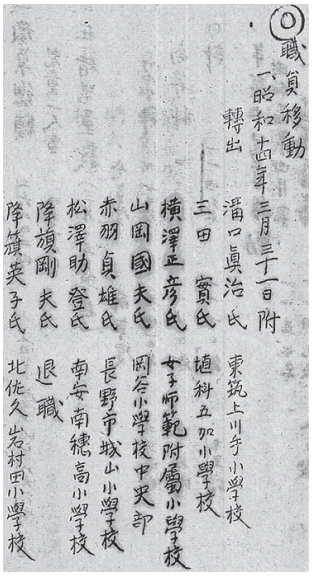
○職員移動
一、昭和十四年三月三十一日附
轉出　溝口眞治氏　東筑上川手小學校
三田　寶氏　植紺五加小學校
横澤正彦氏　女子師範附屬小學校
山岡國夫氏　岡谷小學校中央部
赤羽貞雄氏　長野市城山小學校
松澤助登氏　南安南穂高小學校
降旗剛夫氏　退職
降旗英子氏　北佐久岩村田小學校

図3

その時に西村先生は小学校の六年生だったというので、まあ年齢的に今九十四歳だということを考えると逆算してみると十一歳ぐらいの年齢になるので、たぶん昭和十六年の日本が開戦を米英とした、その時のことを臼井校長が子ども達に訓示をしたのかなと思ってるんですね。でも西村先生は臼井吉見が校長をしている校長講話を聞かれた。それを今でも、もう八十年以上経ってるわけですが覚えておられるのは、西村先生のその記憶力に感心します。その隣に昭和三十三年度の穂高小学校の開校八十五周年誌っていうのを載せてでありますけれども（図4）。横沢正彦先生は、そこに「仝」って書いてあるのは「昭和」ということです。「七～一三」とありますから横沢先生はだから昭和七年から昭和十三年まで穂高小学校に勤務されていたことになります。ここを見ていた時に私がふと思ったのは、右側から二番目に「藤沢利夫」先生とあります。今回の話には全く関係ないんですけど、藤沢先生っていうのは昭和十五年に高家小学校で校長をしているんですね。あの皇紀二六〇〇年の時なんですが、その高家小学校の皇紀二六〇〇年は西田幾多郎の石碑を建てているんですね。他のところは皇紀二六〇〇年に、あの西田幾多郎っていう哲学者のものを、碑として飾るなんていうことはない。本当にそういう戦争に向かっていく時代ですけども、それを任されて、進めたのは実はこの藤沢先生なんですね。こういうことを知っていたので、藤沢利夫先生と横沢正彦先生というのがちょっと重なって、自分は勝手にこの資料を作りながら感動しております。この高家小学校の石碑は今の信濃教育会の生涯学習センター北側に今もありますので見ていただければいと思います。

校長　小松　進　仝　六～仝　七
藤沢利夫　仝　六～仝　七
川上包人　仝　六～仝　七
湯川　浩　仝　六～仝　一〇
輪湖　漣　仝　六～仝　八
寺島貫三郎　仝　六～仝　六
清沢徳雄　仝　七～仝　一四
帯刀周一　仝　七～仝　一二
桜井亀孝　仝　七～仝　一〇
赤羽勝年　仝　七～仝　一四
中島誠策　仝　七～仝　一〇
石田五郎　仝　七～仝　七
横沢正彦　仝　七～仝　一三

図4

続けたいと思うんですが、横沢正彦先生はまあ臼井吉見と附属小学校で出会うわけですね。その後臼井吉見が碌山のことを書くにあたってどうしてずっと横沢先生にルポをしているか、取材をしているかっていうところの話をちょっと続けたいと思うんですが。その下に二冊の本を載せてありますけれども、これは「松本付属会関係雑記帳」です（図5）。松本付属会っていうのはどういうものかっていうのは、この資料の三頁のところに書いて

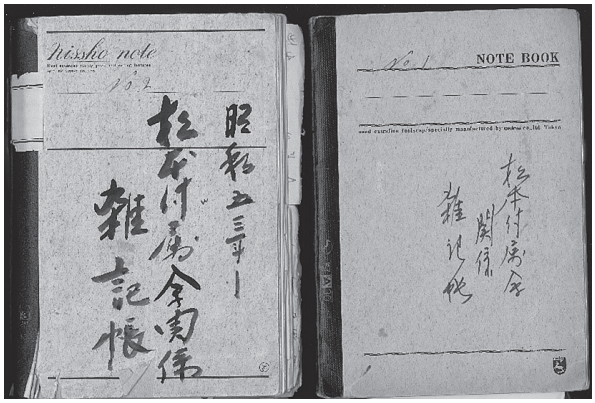

図5

ありますのでまた見ていただくといいと思います。この二頁のところに付属会の名簿を載せてあります。こんなのまで文書館にある。松本付属会の代表の方が最終的に臼井吉見文学館にご寄贈してくださって、なのでそれが今文書館にあるんですけど。そこの一番左上に「臼井吉見　昭62・7・12逝去」とあります（図6）。ちょっと小さい字なんで申し訳ありません。

奥さん、綾さんの名前も載っています。ずっと下がってきて、あいうえお順になってるんですけれども、「小平久吉」っていう名前があるんですけれども、これは今臼井吉見文学館の友の会におられる小平信夫先生、堀金の教育長をやられたり、文学館の館長もされた小平信夫先生のお父さんです。最後に雑記帳が、小平信夫先生のお父さん、小平久吉先生に預けられてですね。あの呼び方なんていうのと、先日信夫先生に聞いてみました。「きゅうきち」と言われることが多いけど本当は「ひさきち」なんだよと言っておられたんで、息子さんが言うので間違いないと思います。その小平久吉先生もこの付属会の仲間、ですから臼井吉見の同僚っていうことなんですね。教え子は西村忠彦先生ですけども、同僚は小平久吉先生や横沢正彦先生なんですね。いろんなところで、毎年一回ずつこの付属会というのが戦後開かれているんですね。そのところが、後ろの頁に書かれていて。そこで毎年一回ずつ一泊二日で話をされている。かしこまった席ではなくて、臼井吉見の生の語りを同僚たちは聞いているんですね。先生たちっていうのは、私も教員だったんですけども、すごいなと思うのはお話を記録するんですね。その当時なので当然テープだとかＩＣレコーダーとかそういうものがないので速記をするんですね。すごいなあと思います。四頁の上のところに、この四頁の上のところは何かというと、三頁の左下に載っていますが、「昭和四十九年度　臼井先生「安曇野」完結祝賀の会記録」。十一月十三日、その臼井吉見の『安曇野』の全五部が完全に完成したので、十一月十三日に開いたその時の記録になります。四番の右上二番のところに、臼井先生のお話っていって、臼井先生がどんな話をしたのかっていうことが記録されています（図7）。

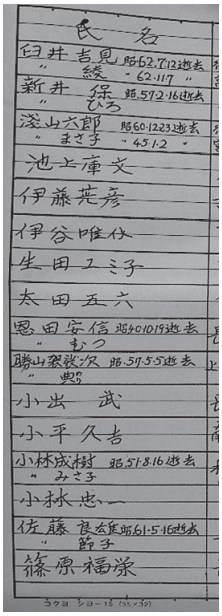

図6

「中学を出てほんとは小説を書くつもりだった。だが才能がなかった事、道草を喰ったこと、悪病にかかったことの三つの為、意を果せないで来た。道草で

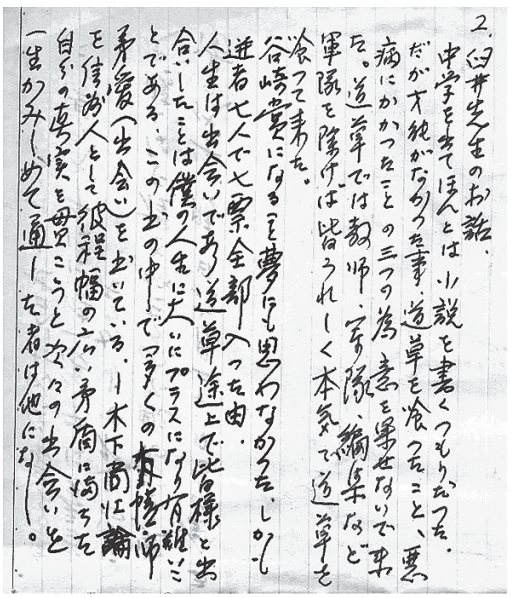
図7

は教師、軍隊、編集など軍隊を除けば皆うれしく本気で道草を喰って来た。谷崎賞になること夢にも思わなかった。」とずっといろいろと書いてあるんですけれども、まあ出会いと対話まあ本当に自分も大事で、それを書き留めた。そういうことをずっとこう書いてますね。臼井がその後七十代になって『獅子座』という小説をまた書くんですね。明治維新の話なんですが。その『獅子座』に対しての想いっていうのは、本当にこれで書いている時のことなので、いっぱい載っています。今回は碌山と臼井ということなので載せてないんですけども、もしご興味のある方がいたら、この付属会の記録集というのも文書館にありますので、お見せしますので、是非ご興味ある方はお越しいただけたらと思います。

四頁の下。臼井先生を囲む会。この附属会ですけども、これを締めくくる、これを締めくくってこれを小平先生に預ける、ここのところの文章を最後にちょっと読んで、終わりにしたいと思います。

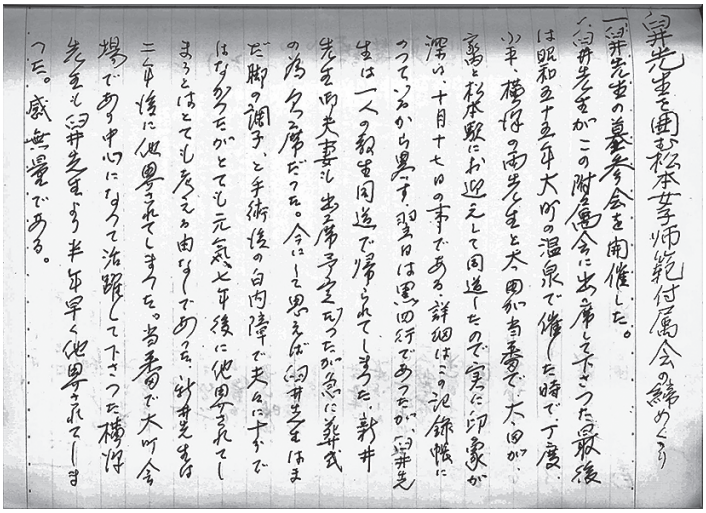
臼井先生を囲む松本女子師範付属会の締めくくり
臼井先生の墓参会を開催した。
臼井先生がこの附属会に出席して下さった最後
は昭和五十五年大町の温泉で催した時で丁度
小平、横澤の両先生と太田が当番で、太田が
家内と松本駅にお迎えして同道したので実に印象が
深い。十月十七日の事である。詳細はこの記録帳に
のっているから略す。翌日は黒四行であったが、臼井先
生は一人の教生同道で帰られてしまった。新井
先生御夫妻も出席予定だったが急に葬式
の為欠席だった。今にして思えば臼井先生はま
だ脚の調子、と手術後の白内障で夫々に十分で
はなかったがとても元気七年後に他界されて
しまうとはとても考える由なしであった。新井先生は
二年後に他界されてしまった。当番で大町会
場であり中心になって活躍して下さった横澤
先生も臼井先生より半年早く他界されてしま
った。感無量である。

図8

臼井先生を囲む松本女子師範付属会の締めくくり

一、臼井先生の墓参会を開催した。

一、臼井先生がこの附属に出席して下さった最後は昭和五十五年大町の温泉で催した時で、丁度小平、横澤の両先生と太田が当番で、太田が家内と松本駅にお迎えして同道したので、実に印象深い。十月十七日の事である。詳細はこの記録帳にのっているから略す。翌日は黒四行であったが、臼井先生は一人の教生同道で帰られてしまった。新井先生御夫妻も出席予定だったが急に葬式の為欠席だった。今にして思えば臼井先生はまだ脚の調子、と手術後の白内障で夫々に十分ではなかったがとても元気、七年後に他界されてしまうとはとても考える由なしであった。新井先生は二年後に他界されてしまった。当番で大町会場であり中心になって活躍して下さった横澤先生も臼井先生より半年早く他界されてしまった。

感無量である。

横沢先生は明治四十年の生まれなんですね。臼井が三十八年なので臼井よりも二年遅れて生まれて、亡くなったのは臼井の半年前、調べてみると昭和六十二年の一月の十一日。さっきの二頁の名簿の一番下のところに「横沢正彦　昭和61・1・11逝去」というふうに書いてるんです（図9）。臼井は七月十二日に亡くなったので半年前だったんですけれども、

横沢先生は亡くなられて、この碌山館の第二代の館長を務められた横沢先生です。その横沢先生について紹介させていただきました。

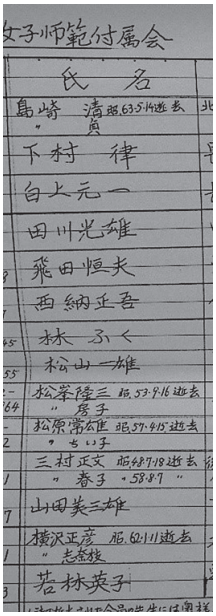
女子師範付属会
氏名
島崎 清 昭.63.5.14逝去
下村 律
白土元一
田川光雄
飛田恒夫
西納正吾
林 ふく
松山一雄
松本隆三 昭.53.9.16逝去
松原常雄 昭.57.9.15逝去
三村正文 昭.48.7.18逝去
山田美三雄
横沢正彦 昭.62.1.1逝去
若林英子

図9

あと横沢先生が昭和八年から十三年まで勤務していた、そういうことってどうしてわかったかというと、穂高小学校の「開校八十五周年記念誌」というのに、これがそうなんですけれども、これに載っていたのでわかったんですね。この記念誌が昭和三十三年に作られたんですね。なのでこの碌山館が開館した年にちょうど八十五周年で作られたんですが、その時の校長先生は誰かというと、巻頭言を書かれているのが、小平久吉先生なんですね。今回、私はこの機会をいただかないかぎり、こんなご縁なんてきっとわからなかったと思うんですよ。碌山館が開館した時に穂高小学校が八十五周年を迎え、その記念式典やいろんなものをしていたのが小平先生、その小平先生と同僚であったのが臼井吉見。こういうところが、自分として、つながって、ご縁があって。臼井吉見は出会いと対話という話をしてくださるんですけども、今回自分がご縁をいただいて出会わさせてもらって、小平久吉先生と対話をさせてもらったし、横澤正彦先生とも対話をさせてもらいました。

最後に一言。間違い探し。きっとこれは碌山館もわかっておられることだと思うんですけれども、碌山館で出されている『碌山美術館誌』っていうのに、こういうのがあるんですよ。十九頁のところに、「穂高小学校の教師横沢正彦氏は昭和十七年に「荻原碌山の彫刻作品について」を雑誌「信濃教育」に発表し、続いて昭和十八年には「荻原碌山の芸術」を同誌に発表した。」とあります。昭和十八年には臼井吉見と松本女子師範附属に勤務しているので、この記載は誤りです。でも間違いというのはそれだけでなくて、昭和の終わり頃に出された『南安曇教育会百年誌』の横沢先生のところでも、同じように勤務場所が南安曇になっていますね。なんでそんなふうに間違ってしまったのかなと思っています。それでは、私の話は終わらせていただきます。ありがとうございます。

太田　平沢先生、どうもありがとうございました。平沢先生は臼井吉見文学館の館長をされておられますし、安曇野市の文書館の館長をされておりまして、身近にそういう臼井吉見さんとか、安曇野の方々の原典といいますか一次資料を管理されています。そのなかで清沢洌の通称「暗黒日記」というのがありまして、あれをなんとか今文科省の先生方と、県指定の文化財にしようと思っているところです。清沢洌さんというのは、研成義塾の卒業生で戦前戦中ずっと自由主義の立場から批評をなされて、戦中に亡くなっているのですが、「暗黒日記」というのは後からつけた言葉で本来は清沢さんの日記なんですが、その原著をみることができるですが、清沢さんの話になるとついアカデミックになってしまうのですが、私はアカデミックなことが非常に得意というわけではないので、ちょっと雑談から申し上げます。

まず今日お手元に届いております、これ、一万部刷りまして、今一生懸命配っております（図10）。これパッと見ると表紙が市役所が作ったパンフレットとは思えない表紙ですが、とってもいいです。登場人物が二〇〇〇人を超えるということですが、この一番最後のところに横山拓衛さんの名前が出ています。これは私が一番最後は横山拓衛さんにしてくれとお願いしたんです。横山さんは『安曇野』の最後に登場して、まさに碌山館で亡くなられた方ですね。臼井吉見の『安曇野』の第五部の最後の頁に横山さんが出てきて、このオルガンで信濃の国を歌う。この箇所を読んで私はすごく感動しました。

で、もう一つ。表紙の下に碌山の言葉として載っている、これ実は臼井吉見の言葉なんですけども、碌山がアメリカやフランスから帰ってきて、いったん実家に戻った時におばあちゃんに、世界中見てきたけどどこが一番綺麗だったか聞かれて、どこも悪くなかったけど一番綺麗なのは安曇野だと答えるくだりがあって、それでこの後です、実は宴会が始まることによって、おばあちゃんが守衛に安曇節でも踊ってはどうだと

図10

言って、歌詞も入っていて踊るくだりがあるんですが、実は禁酒会のところでも出てきますけど、最初のところは「何か思案の有明山に小首かしげで蕨出たチョコサイ　コラコイ」が出てきて、そのあともう一回「槍で別れた梓と高瀬、めぐり逢うのが押野崎」とあるんですが、今日は余計なことになっちゃうんですが、実はご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、安曇節は榛葉さんという方が大正の末期にまとめられたもので、守衛が帰国した明治四十一年の時にはなかったと思うんですけれど、まあそれはそれで。

あの実はこの前シニアクラブの芸術祭がありまして、豊科公民館に行きましたら、最初に安曇節がありまして、次に安曇音頭というのを歌って踊っておられまして、それは安曇節の原形ではないかと言われているんですね。そこにも「チョコサイ　コラコイ」という掛け声がありますし、あるいはこちらを言っているのかもしれません。まあそれはそれとして。

先ほど『安曇野』の話になりまして、碌山とのつながりはもちろんありますけど、私は実は去年、臼井吉見文学館友の会の皆さまの主催で一度『安曇野』について、堀金の体育館で一時間半にわたってしゃべっておりますので、ほとんどネタが尽きております。まあ一部ダブるかもしれませんけど、いくつか気の付いたこととか、あまり聞いたこともないネタを探しておりますので、そんなことを少し。

今年まず私どもといたしましては、碌山美術館にテコ入れをしようと、テコ入れと言ったら恐縮ですけれど、もっと多くの人に来ていただきたいということで、まさにこのパンフレットがそうですし、先ほどおうか

がいしたところによると置いておいた一〇〇部があっという間に出ちゃったということですから、また追加したいと思いますけども、まさに碌山美術館というものが安曇野の象徴でありますので、ここにもっともっと多くの方にお越しいただきたい、幸いコロナが一応終息といいますか、分類がゆるくなりましたので、なんとかなりそうな気がしますので、ここをなんとかしたいというふうに考えています。今日は皆さん安曇野の方だと思うんで、電車で来られた方はいないと思いますが、穂高駅で降りて、碌山美術館へ来る道、私たちは知っているからすぐ来れるんですけども、観光客の方がちょっとわからないという状況もあったので、線路脇の舗道のところにいくつか碌山美術館のイラストを銅版に写して入れました。矢印を書いて、ここを行けば碌山ということがわかるように標識を作りました。ですから、これからも少しずつ手を入れていかないといけないと思っております。それでさっきの話にありますように昭和四十八年の十二月発行の雑誌『展望』に『安曇野』の最終話が掲載され完結を迎え、翌年の五月くらいに第五部が刊行されました。

私はちょうどその時高校三年生で、その八月のほとんど末に近い頃、夏休みはたぶん終わっていたと思うんですが、することがなくて図書館で『安曇野』を読破して、それで学園祭が始まる時だったんでよく覚えているんですけど、最後の横山さんがオルガンを弾く「信濃の国」のところで、ほーと溜息をついたんです。そのことを覚えています。非常に長い小説でございまして、その後大学の四回生の時にもう一回読んで、その後もう一回読んで、三回読みました。

それで、さっき申し上げました通り、去年の春に文学館友の会のみなさんの前で講演することになって、四回目を試みて、全巻買い直しまして、二巻の途中で力尽きてしまったのですが、本当に素晴らしい小説だと思っております。

ここのところに伊藤さんの協力を得て、関係者の名前が出てますけど、これだけ見ても本当に非常に難しくて、ですね、全体の流れを、難しいだろうということで、実は赤羽康男さんという市民タイムスの記者をやられた方が以前市民タイムスに『臼井吉見の『安曇野』を歩く』という連載をされておりまして、それが全三巻、上中下で刊行されました。私の母親は一昨年九十九で亡くなったんですけど、それから十年位前ですから、八十七か六の頃に、突然『安曇野』を読みたいと言って、私の持っている一巻を渡しましたら、長いことかかって読み終えまして、とても面白かったけど、とても難しいという話でありました。それでその時に、これはこれでいいけれど、もっとわかりやすい本はないかということで、赤羽康男さんの『臼井吉見の『安曇野』を歩く』を上巻から上中下、三巻を渡しました。これは一応全部読んだらしいです。それでそのあと私の母親は特別養護老人ホームに入ったので、その時に、私の母親は三冊持って入りました。どこまで読んだかはわかりませんけど、三巻までは読んだようです。だけどまあ母親が一昨年亡くなって、ちょうど選挙の前でバタバタしたんですけども、荷物を取りに行ったら三巻ともなくてどこかへいっちゃったんですけども。あれがほんとは臼井吉見の『安曇野』を読む際のまあガイドブックと言うか。ですが残念ながらこっちの方も絶版でございまして、古本屋さんで三冊揃えて買うと一万円超えちゃうんですね。でなかなか難しいと思ってまして。この前市民

タイムスの社長にお願いしたんですけど、ちょっと首を縦には振らなかったです。一方で『安曇野』もこのあと文庫本が筑摩書房から全五部が出まして、でも今これもなかなか普通では買えない状況で。ネットには出てますけど。なかなか買えないんで、まだ打ち合わせの段階ですけども、来年が臼井吉見さんの『安曇野』の刊行五十年ということでございまして、この前筑摩書房の社長さんとも直接話をしまして、文庫本なら再版できるよ、というんで、ちょっと安曇野市もお金を出さないとたぶんダメなんですけども、多くの人に買っていただければ、安曇野市が出す分が減りますので。そういうことで。今ちょっと構想でやっております。やはり多くのみなさんに読んでいただきたいと思うんですね。

昭和五十年、四十九年、このあたりの年というのは、もうじき半世紀経ちますけど、安曇野という言葉が広く人口に膾炙したきっかけの頃です。みなさん、私と同じ年ぐらいですけど、子供の頃は、安曇平って言いました。安曇野という言葉はあまり使わなかったですね。松本平、安曇平と言っていたんですけども、安曇野という言葉は臼井吉見の創作ではなくて、明治時代からあったようです。大正の初めに出た『南安曇誌』の巻頭の言葉のところにも安曇野という言葉が三回出てきます。それから歌人の土岐善麿さんが詠んだ歌のなかにも、戦前のものですが、安曇野という言葉が出てますんで、安曇野という言葉自体はあったようなんですが、なかなか人口に膾炙せず、そもそも読み方が難しいですよね。今ようやく安曇野という言葉が広まってきて、どこに行って安曇野という名刺を出してもみなさん安曇野と読んでいただいております。昔はたぶん読めなかったと思いますね。「あん」と「くもり」のところで「あづみ」という読み方も非常に難しい読み方だと、そういう具合に思っております。

幸いにして今多くの方が安曇野を知っていただいて。で、このことは私はあちこちで言っているんで、もう聞き飽きたと思いますけども、「野」という言葉を地名にして上に二文字で合計三文字の地名、これは非常に夢があっていいとこだということをいつも言っておりまして。「北の国から」の富良野、それから國木田独歩もあるし、関東平野を思い出させる武蔵野、それから森鷗外のふるさとである島根県の津和野、みんな三文字で「野」が付くんで、これは本当にそういう意味ではいい漢字に恵まれたというぐあいに思っています。

ではついでに申し上げますと、津和野出身でもう一人有名な、安野光雅さんという絵本作家がいらっしゃいますけど、この方も臼井吉見さんの『安曇野』が出た後、安曇野という名前を画集に使っています。安野さんは三年ぐらい前にお亡くなりになられましたけど、非常にすばらしい絵本作家でした。安野光雅さんの『安曇野』の一部をとってちくま文庫の表紙のカバーになっています。ですから、できた年代は違いますけども、有名な絵本作家と評論家で小説家であった臼井吉見とは、安曇野というキーワードで、筑摩書房さんのおかげですけど、一緒の本で見れると、そういう状況だというぐあいに思っています。

それでさっき申し上げた五十年くらい前ですね、さっき申し上げましたように、臼井吉見さんの『安曇野』が最終的な第五部が刊行されたのが、一九七四年の五月ですね。私が最初に読んだのはその年の八月。で翌年一九七五年、昭和五十年、この年は、安曇野という名前を全国に広

めることとなった『水色の時』という、田淵行男さんがモデルですけども、ヒロインはテレビ初主演だった大竹しのぶさんでした。

で、この話もあちこちでしているので、もう知っている人は二度になるかもしれませんが、あのロケというのは私のいた高校を使っておりまして、私はその年の三月に卒業ですので、その年の一月にたしか一生懸命撮っておりました。特に合格発表の場面があって、大竹しのぶさんの役の弟さんがその高校を受けるっていうような設定だったような、第一回は弟の合格発表を見に大竹しのぶさんが自転車で行くということで、どこまで行ったのかちょっとわかりません、松本までじゃないと思うんですけど、あれはテレビのことなんであれですけど、それで合格発表の場面があって、でその時に大竹しのぶさんがあったあったっていう合格の掲示板を指さし喜ぶ場面があって、それで大竹しのぶさんがアップになって、その次にですね、ポーンとまた別の人が来るわけですね。私のよく知っている人でですね、ちょっと顔の大きい人なんですけど、務台俊介君っつって、彼も私の同級生なんですけども、なんであそこで彼がアップで出てくるか、いまだに私はよくわからないですね。少なくとも高校三年の時で、最後の時だったんで、誰も下に行ってエキストラに出ようなんていう発想はなかったと思います。本当に画面いっぱい出ました。ほんの一秒ないくらいですけども、あと調べましたらＮＨＫのアーカイブには『水色の時』の第一回が残っているそうなんで、お暇な方はどうぞ調べていただければ、たぶん、瞬間ですけど務台俊介君の若かり日のアップが見れます。それはそれとして。

さっき安曇野の話をしましたけど、最近このくらいの大きさの、そんなに大きくない、新書版のちょっと幅が広いくらいの旅行ガイドブックがいっぱい出てまして、七種類だか八種類あります。もちろんこの安曇野も入っているのですが、安曇野はだいたいその場合松本とか上高地と一緒に一冊になっています。ここで一種類を除いてほかの六種類か七種類かはすべて安曇野、松本です。安曇野が先に来ています。あのガイドブックというのは、女性のちょっとしたハンドバッグやサイドバッグに入るような感じなんで、若い女性をターゲットにしたガイドブックなんですが、それでは松本より安曇野の方が上ですね。安曇野、上高地、松本っていうのがあります。これ本屋さんでご覧いただければわかりますけども、ほとんどのガイドブックは安曇野の方が先に来ているんです。

そういうわけでさっき申し上げたとおり安曇野の名前がだいぶ広がってきまして、今月末に、投票された方もいるかもしれませんけど、再来年の夏前に交付予定になっております、安曇野ナンバー、ご当地ナンバー、車のナンバーですね、あれの図柄が決まることになっています。だいたい多数の票が入ったものになる、つもりであろうというぐあいに思っております。全国的にもご当地ナンバーいっぱいありまして、今回も実は三つ候補に出して、これは事前の審査で投票やってベストスリーを選んだんですが、あんまりいっちゃいけないのか、わかりにくいので、遠くから見ただけでは、あのまあ車のナンバーってやっぱり近くで見るものじゃないので、ご容赦いただきたいっていうぐあいに思ってます。国土交通省の一階の待合のところの壁にいっぱいに全国各地のご当地ナンバーが図付きで飾っておりますので、正直、そういう意味ではぜひ長い目で見てやっていただきたいというふうに思っております。今回の安

曇野ナンバーは安曇野市、池田町、松川村、生坂村の四つが入っていますんで、それぞれの特徴をちょっとずつ入れようということもあって、散漫な感じもしますけど、まあまあ。

それで、さっきもうすでに平沢先生の方から話があったんで、あとは本当に落穂拾いをやるだけなんで。本当に。やっぱり安曇野っていう言葉をこれからも広げていきたいということでやっておりますが、これがそうですし、安曇野ナンバーもそうですし、そのなかでやはり中心になるのは碌山美術館だと何回も言っているとおりです。私は碌山美術館の理事にもなったんで、あんまり造反するようなこと言っちゃいけないんですけど、この際だから一人の市民から言わせてもらうと、かつては碌山美術館って入口じゃなくて本館のところで入場券を売っていたんですね。だから観光客の方は普通に美術館に入られて写真撮ったりしていたんですね、それが今は、入口のところでお金をとるんで、あんまり多くの方に来ていただけないじゃないかなって若干思っています。たぶん新館を作った時に、新館の方に入るお客さんがいるんで、こうなったと思うんですけど、まあ私に言わせれば、本館でお金とりゃいいんじゃないかなって。でもこれは長い長い議論を積み重ねなくてはならないと思います。そういうかたちで、インスタグラムとかさまざまところで、エックスとFacebookとか写真で発信するのがあるんで、そういう意味で言うと、まず多くの方に写真で撮っていただかなくてはならないのではないかと、そういうぐあいに思っております。

それからさっき昭和五十年前後は一つのメルクマールと、今あの明日が日曜日で九時からEテレで新日曜美術館がやってますけど、これについては一度平沢先生が友の会の講演会で講演されたんで、私の話はだぶりになりますけど、あの日曜美術館、本当のオリジナルの日曜美術館の第一回は昭和五十一年の四月十一日です。第一回目は臼井吉見さんがゲストで来て「碌山と安曇野」という名前でやっています。もちろんそれはちょっと見ておりませんけども、第一回目はそういう意味では非常に、あっそうそう、あの後ね、『Brutus』とう雑誌でも日曜美術館の特集をやってそれにもその話は出てきますね。で、その時にアシスタントをやっていた方が太田治子さんという方で、名前をご存じだと思いますけど、太宰治の娘さんですね。この方がちょうどたまたまアシスタントをやっていて、その後『大法輪』という仏教系の雑誌ですけども、そこにエッセイで「大法輪と私」というのが出てます。これはネットを探せば出てきますのでご覧いただけますけど、第一回の日曜美術館で臼井吉見さんが出てきて、碌山について語ったと。その時に、これは臼井吉見の言葉ですけども「碌山は年上の人妻の黒光に惹きつけられ、いよいよという時に突き放され、碌山を生かしたのも殺したの黒光です」って臼井吉見さんが言ったんですね。太田治子さんはそれ以前に太田治子さんのお母さん、だから太宰治の奥さんですね、その方が読んでいた『大法輪』という雑誌のなかのグラビアに白髪のおばあさんが椅子を持ってすくっと立っていた。それが中村屋の女主人の相馬黒光であったということで。それをずっと印象的に覚えていたんで、太田さん自身は一回目にそんな話を聞いてびっくりしたと、で、太田治子さんの印象では、黒光は椅子を持ってすくっと立った方なんで。臼井吉見さんのおっしゃった、碌山を生かしたのも殺したのも黒光ですという言い方にちょっとびっく

りして、そこでいきなり『大法輪』の話をし出したということがありました。

碌山の死に方については、これまでさまざまな、『安曇野』にも入っていますね、高村光太郎が黒光に梅毒をうつされたのが原因だとか、さまざまなことが言われていますけど、これについては元館長の五十嵐さんがきわめて精密な考察を重ねたものが『碌山美術館報』に載っていますので、これについては私はだいたい碌山の自殺説はなくなったと思っています。そのくらいきちんとした論文ですので、いずれまた武井さんに話していただく機会を作っていただきたいと思っています。

第二部で碌山が亡くなったあと相馬黒光が碌山の日記を破いて燃やすシーンがあって、ところが臼井吉見さんがどっかで書いたんですけど、しばらくたって、臼井吉見の文章というものは現代文が硬くてつまらないという評論が出た。それに比べて碌山の日記の文章は素晴らしいって書いてあったんですって。ただ碌山の日記というのはそこに書いてあるように焼かれてしまっていたので、実は碌山の日記と称する文章は全部臼井吉見さんが自分で書いたものだったんです。自分の書いたものが一方では貶(けな)され、一方では褒められたって、ちょっとその評論家をおちょくってたんですけど。

私は臼井吉見さんの生前に二度お話を聞いたことがあります。一回目は大学の二回生だったと思いますけど、豊科の公民館で一乗寺さんが開いていた安曇野夏期大学の時に聞きました。その時非常に印象に残ったのは、これも『安曇野』に出ているんですけど、山本五十六さんが最後太平洋戦争の末期に一式陸攻（一式陸上攻撃機）というとても遅い重厚な飛行機に乗っていて撃ち落されるんですね。あれは本来ならば、司令官というものはあんなところに行くはずがない、あれは山本五十六の一種の自殺であると言っておりました。この話はこの後いろいろなところで歴史家が言っておりますけど、臼井吉見さんと似たようなことをおっしゃる方がずいぶんといらっしゃいます。それが一つ。それから、二つ目はですね、一九七九年のたぶん夏だったと思いますけども、三郷の中学校の体育館かどっかで講演をされたのを聞きました。その時に非常に印象に残ったのは、これも前に一回申し上げたんですけども、臼井吉見さんは日本語について語られました。ずいぶん。そのあと例えばいうところで「日常使われている生活の語のなかには、からだに関する、特別の意味を担った言葉がどっさりあります。大事な言葉は、ほとんど、からだと関係しています。頭のてっぺんから足のさきまで、われわれのからだの部分を意味する言葉が、どんなにわれわれの精神や能力を現す言葉として通用しているか」と書いてありますね。それで例に挙げているのは「肝をぬかす、肝がつぶれる、肝をひやす、肝をこらす」それから「腰が高い、腰が低い、腰をあげる、腰がふらつく」等々、それから「手があがる、手がおちる、手をあげる、お手上げ、手を貸す、手を出す、手を借りる」等々。こういうのがいっぱい出てきます。この話をその時されたんで、私覚えていたんです。これは、一九七九年、その年の十二月に碌山美術館から刊行された『荻原守衛の人と芸術』のなかに出ています（四六〇頁）。これは臼井吉見さんの文章ではなくてそのときの最後の講演の講演録じゃないかと思います。あの途中で「長々と松沢求策について語りました」と出てきますので、もしかしたらそうじゃな

いかと、もし違ったらごめんなさい。その中に今言った言葉も引用されておりますので、まさに臼井吉見さんの言葉として私が覚えている、これも実はつい最近見つけたんです。というのはですね、あの豊科にあります図書館で、二階で会議があって行って、降りてきたらリサイクル本が並んでいまして、そこにですね、今申し上げた『荻原守衛の人と芸術』がありました。それで貰ってきたら、今言ったものがちょうどあったですね。七九年ですから今から四十何年前に講演で聞いたことがそのまま書いてあったんで、ああそうだと思って、大変嬉しく思ったんです。

それから実はその時もう一冊本がありまして、それもリサイクル本で、どうぞご自由にということで貰ってきたんです。『井口喜源治と研成義塾』という、これも立派な本です。これは南安曇教育会の編集です。この本の中に研成義塾の「入塾者名簿」というのが年度別で載っていまして、明治三十八年度に「太田晴繁」という名前があります（三三五頁）。これ実は私の祖父なんですね。私の祖父の妹が、私の大叔母にあたる者が、二十年くらい前に九十九歳で亡くなったんですが、その方が生前に、私の兄は三枚橋の学校に通っていたと言っていたのを、ちらっと聞いたことがありました。その後確かめる術がなかったんですけども、これ見たら、明治三十八年で、ちょうどぴったりなんですね。その時にうちのじいさんは堀金の中堀から三枚橋まで、何キロあるか知りませんが、毎日歩いて行ったんですね、これを見てびっくりしました。

もっとびっくりしたのは、同じ明治三十八年の入塾生のところに「林茂平」という方がいらっしゃって（三三四頁）、この人は穂高の有明の方なんですけども、その人の息子さんが今百四歳で生きてまして、実は私の姉の嫁ぎ先のおじいさんで、そんな話をしたら、いや覚えていると、うちの父親はたしかに研成義塾に通っていたと言っておりました。ともに明治三十八年に研成義塾に入った二人が、どのくらい親しかったかどうかはわかりませんが、せいぜい二三十人ですね、双方の孫が六十何年か経って知り合って結婚したので、縁は不思議だなあと思いました。

ちなみに明治三十六年に清沢洌が入塾しています。清沢洌は明治三十八年まで在籍しているので、うちの祖父は一年でどうも辞めたようで、まあ遠かったからね。でもまあ祖父が清沢洌と会ったことがあるのかもしれないなあということがわかっただけでもありがたいと思っています。豊科の図書館へ行くと今でもリサイクル本を定期で見ているんですが、あの時ほど素晴らしい収穫があった時はないですね。本当にびっくりしました。

臼井吉見さんについては、今れんげ忌というかたちで七月の十二日に命日に会を行なっています。さっき言った表紙のところにもありますように、臼井吉見さんは安曇野にれんげの花が咲く頃というのは非常に美しいということを言ってらっしゃいまして、私たちの卒業した堀金中学校というのは、戦後臼井吉見さんが作詞されまして、二番の冒頭は「げんげ田に白壁映えて」となっています。作曲は芥川也寸志さん、芥川龍之介さんの次男の方です。この方の作曲で、ちょっと普通の校歌と違ってアップテンポで軽やかなリズムです。ですからそういう意味で言うと、れんげ田をどっかで一回復活させようかなと思ってるんですけど、あんまり簡単に言うとあれなんで、今ちょっと様子を見ながら。一時期ちょっと観光的に一部やったことがあったようですが、なかなか今は。

れんげは空中の窒素を固定化して、肥料になるので非常に昔はよく植えていたんですが、今は化学肥料も出てきましてなかなかつくらなくなっちゃったんですけど、たしかにれんげが田んぼに映るのは非常にいいですね。でそこに水が張られて水鏡ができて、でアルプスがそこに逆さになって映るという。

安曇野はみんな美しいと言ってくれますけど、私の思う安曇野の美しさというのは大自然である北アルプスと、その手前に広がる、例えば縦横に走っている堰、勘左衛門堰とか拾ヶ堰とか、といった堰と、あるいはそこに広がる水田、あるいはわさび畑、それから点々とある昔ながらの古い民家とその周辺の屋敷林、こういったものがあるのが、大自然と人の営みを両方見ることのできる風景ってあんまりないと思います。そういう意味で言うと安曇野というのはそういう恵まれた風景だとそういう具合に私思っています。臼井吉見さんが好きだったれんげ田というのは、どっかでやらなきゃいけないかなと思うんですが、ちょっとなかなか難しくて。今考えてますけど。そういうわけでございます。

それからこのパンフそのものが大河ドラマ化ということでやってるんですけど、去年から今年にかけての『大河への道』という、中井貴一さんが主役をやりましてですね、伊能忠敬さんを、あの方を大河ドラマにするっていうものの苦労を途中まで書いた映画ですね。それがありました。私もそれを見ました。で、そのなかにいろんなことがいっぱい書いてあります。シナリオを書かなきゃいけないとか。実は今日そこにうちの政策部長が来てますけど、一緒にＮＨＫへ行って、ＮＨＫの「おひさま」をやった時のプロデューサーと話をしまして、ああいうシナリオって用意しなければいけないのですかと言ったら、必要ありませんって言って、で、このパンフを作っているのは寺島君という若い彼で、もともと信濃毎日新聞社で記者やった方がうちの職員になったんですけど、その彼にシナリオを全五十話書いてもらおうと思っていたので、それがなくなりましたので、ほっとしていました。それと署名活動ってどうですかって聞いたら、全く関係ありませんって言われました。伊那市が保科正之、徳川家光の弟ですね、彼は高遠出身でその伝記を大河ドラマ化にしようと一時期十数年前非常に頑張って二万人とかの署名を集めたんですよ。まあちょっと様子見ながらだと思ってます。

今年の春、五月の時にですね、多くの市民のみなさまに、これ抽選で落ちた方もいらっしゃるんですけども、博多どんたくに、福岡市の東区というのは、あそこにある志賀海神社と穂高神社の関係、安曇族ですね、そういう関係があって、自治体は姉妹都市をやっておりまして、博多どんたくのパレードに参加させていただきました。その時私たちの前にいたのが九州の立花宗茂を大河ドラマにしたいという旗を振っている人がいて、平林市議会議長が、何年くらいやってるだと聞いたら、十五年と言っていました。あとどのくらいかかりますかと聞いたら、もう十年かかりますって、こりゃえらいことだぞって。たしかにＮＨＫには四十も五十も話が来ているそうです。ですから、これはもう長い目で見ていただきたいと思います。なんとか押し込みたいと思っています。というのも、やっぱり今も家康をやっていますけど、戦国だけでは厳しい、まあ来年は紫式部をやるようなんですけども、近代もやるんですけどね、一番ネックなのは「いだてん」が大河ドラマ始まって以来の最低の視聴率

だったということで、若干ＮＨＫが躊躇しているようなところがあるような気がします。ワンチャンスあると思っていますので、もう少し考えたいと思います。それから筑摩書房の『安曇野』の復刊を含めて、必死になってやりたいというふうに思っています。

あとはですね、いつも申し上げるんですけど、ここには碌山美術館があります。それからちょっと行ったところに井口喜源治記念館があります。それから臼井吉見さんの文学館があって、そう考えるとですね、ここは個人的な方を顕彰する美術館、記念館、文学館がとっても多いですよね。穂高には高橋節郎さんの美術館もありますし。さっき言った井口喜源治さんや碌山の、それから豊科行くと飯沼飛行士の記念館、それから田淵行男さん、さっきの『水色の時』のモデルだと思いますけど、それもありますし。それから三郷に行くと貞享義民記念館があり、これは中萱加助ですね、そういった形で非常に多く方を顕彰する所であります。

実は、ほかの、私は県下七十七市町村全部まわってますけど、ほかのところ行くとですね、申し訳ない言い方をすると、本当に知られない方でも一生懸命、記念館とか顕彰館を作っているわけです。それを考えるとこの安曇野エリアというのは、『安曇野』にも出てきますけど松沢求策ですとか、さっき言った清沢洌ですとか、ほかの市町村では間違いなく、記念館作っている人たちがちょっと記念館作れない状況にあります。

博物館の構想というのを作って、二十年三十年経ったら作りましょうって言っていましたが、もう十年経っちゃってあと十年くらいしかないんですけど、今年から博物館をもう一回どうやるかってことで検討が始まりました。そのなかで僕が一度議会でも答弁したんですけども、新しい博物館を作るとすれば、今まである博物館をネットワーク化しながら安曇野の先人たち、そういった人たちにスポットを当てたらどうかという話をしたことがあります。今申し上げた方々のほかにもまだそういった方がいっぱいいらっしゃるんですね、例えば植原悦二郎さんという政治家、戦後ちょっとのあいだ内閣で大臣をやってて、日本国憲法のところに署名されている方がいるんですね。そういう方も含めて、もう黙っていても五人や十人すぐいくような、まあそういった方々を何らかのかたちで、先人というものを集めることも必要かなと思っています。で、それが先決かどうかは別として、実は明科にはそういった博物館がないんですね、かつては公民館に宮下太吉っていう、あの大逆事件の時に処刑された方がいらっしゃって、あの方は出身じゃなくて来られた方なんですけど、そういった方がいて、それがいいか悪いか別としても、そういった歴史をどっかで記録しておかないと、だんだん経つと忘れられちゃうということがありますので、そういったことも含めて、検討していきたいという具合に思っています。あとそうですね。

平沢　大河ドラマの話を熱く語ってくださいましたけれど、今、あづみ野テレビで五分間ばかり、昨日から流れ始めたって聞いていますが、見た人いますか。太田市長がいっぱい出ていて平沢は、十秒くらいしか出てないんですが。来週の火曜日二十八日ＮＨＫのイブニング信州という番組があるんですけども、毎週火曜日は地元のケーブルテレビが当番で順番に番組を流す枠があるそうで、来週の火曜日はあづみ野テレビさんがその枠になっていて、今回の取り組みのことについて、見てないので

わからないんですが、私も三十分くらい収録されましたが、一昨日あづみ野テレビのオーナーさんから、「平沢館長一生懸命してくれましたが、たぶん十四秒くらいかな」と言われましたので、市長は四分くらい出ていると思います。ちょっとわかりませんけれども、そんな番組がイブニング信州で流れますので、もし覚えていたら。

あと人物顕彰のお話を市長されましたけど、さっき紹介した小平久吉さん、小平信夫先生のお父さんの八十五周年記念誌、これに寄稿している方が、昭和三十三年にできた本なんですけども、東條觸（たかし）、研成義塾の井口喜源治に学んだ人ですよね、それから穂高の人はわかると思いますが、望月市恵、すぐそこのところがおうちなんですけど、望月市恵の一言が熊井啓を作ったというふうに言われているのはもう有名な話ですけども、その望月市恵先生もここに寄稿されていて。それから荻原碌山があまりにも有名すぎるので、小川大系の記念館はできないと、そういう話をよく聞きます。小川大系は穂高の文化というか文化協会をリードしてくださった方なんですけども、その小川大系もここに寄稿していますので、どんなようなことをみんな書いているかなという興味のある方は文書館へ。記念館の話が今されましたけども、本当に一人突出した人がいると周りがちょっとかすんで見えてしまうというのはちょっとあるかなと思いますね。

太田　今の小川大系さんの話で言うと、松本の駅前に播隆上人の槍ヶ岳を開いた方の像がありますね、これは上條俊介さんという朝日村の方なんですけど、朝日美術館に行くとあそこに同じものが展示されていますが、で、実は一緒に槍ヶ岳を開山した時に、三郷の中田又重さんという方が登っていまして、中田又重さんを、上條俊介さん曰く、播隆上人と一緒に銅像を作りたいということで、上條さんは私にはそんな余裕がないからと、弟弟子の小川大系さん（に作らせた）、どちらも北村西望さんという長崎の原爆の像を作った方の、お弟子さんなんですけど、で、それが某所にあるということは聞いておりますので、二〇二八年が槍ヶ岳開山二百年だそうでございます。それを三郷の人を中心にぜひなんとかやりたいという話があがっておりますので、小川大系さんの作品のブロンズ化ですとか、ちょっと考えたいと思っております。さっき武井さんに聞いたら、ブロンズにするには一千万円くらいは最低かかるといわれたので、まあなんとか、なんとかしたいと思います。本当はもともと二人が、立っている播隆上人の横に中田又重さんが座っているということで、その原型ができてますので、それをなんとかしてあげたいなと思っています。それをブロンズを作るだけでなくて、昔の道で、上高地へ抜けるその先の道へっていう、それができるようまた考えたいと思います。

さっき言った本来であれば当然記念館ができるっていう、上原良司さんも再来年が没後八十年ということでありますし、本当にね安曇野は先人がたくさんいらっしゃいますので、本当にあの、長野県の小さなところまわるとね、この人誰っていうことがぽつぽつあるんですよ。それはそれで立派なことだと思うんですよ、地元出身の方を長く顕彰するというのは。それを考えるとうちはあと十人くらいはやれると思うんですよ。だからちょっとこれは新しいスタートというのは忘れて、まとめるとい

うと失礼ですけど、一緒に顕彰することをやりたいと思っています。何人かの方をまとめて顕彰するというのはあちこちの自治体でやってましてね、私が知ってる限りでも、岐阜県の大垣市にそういうものがありまし、愛媛県の西予市、宇和町、それから金沢市にはもちろんあそこに生れた三文豪を含めて、いろんな方の記念館がありますね、ありますけどそれとは別に、金沢ふるさと偉人館、そういう名前の、何人の方をまとめて顕彰する記念館もありますんで、そういった形があっているんじゃないかなと思っています。

いずれにしましても、安曇野というのは、こういう文化芸術の宝庫なんで、これをぜひ多くの方に知っていただいて、顕彰していくということが、大事だと思っています。安曇野、この語の持っている響きについては、今とっても評判がいい、ぜひやりたいと思います。

新宿中村屋さんはとってもよくしてくれています。新宿区長も、中村屋さんはあるし、中村彝の記念館もあるので、臼井吉見さんの『安曇野』の大河ドラマ化に向けては全面的に協力してもらっています。もちろん中村屋さんはとっても協力してくれています。そういうことで多くのみなさんのご協力を得ながら、碌山をはじめとする『安曇野』に出てくる人物の顕彰を今後も続けていきたいと思っております。それでは締めを平沢館長、お願いします。

平沢　ちょうど時間となりましたので、ありがとうございました。